

教師の  
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立高郷小学校)  
イラスト | 吉田朋子今回のテーマ  
挨拶が良好な  
人間関係を作る

「おはようございます」

朝、人に会った時の挨拶の語です。「お早くお出かけですね」が語源だといわれています。日本人は昔から相手を気遣い、気にかけていることがよくわかります。

今回は良好な人間関係を作るために欠かせない挨拶についての「腕前診断」です。

## 1 挨拶を返してもらおう

「A先生に『おはようございます』って挨拶をしたのに無視された」

教室に入ってくるなり、顔を真っ赤にして怒っているBさん。A先生とすれ違った時に挨拶をしたのですが、素通りされたらしいのです。Bさんの不満は更に続きます。

「自分から挨拶をすることが大事」って言うっているくせに、自分は挨拶を返さないんだから「喋れば喋るほど彼女の怒りはヒートアップします。」

「なるほど」「そうだね」とBさんの気が済むまで、私は聞き役に徹します。やがて、興奮が収まり口調が穏やかになってきました。Bさんは私の話に耳を貸せるようになってきました。

## Q1

挨拶を返してもらうには、どんなアドバイスをしたらいいでしょう。

- ① もっと大きな声で挨拶をすればよかったね。
- ② 「A先生」って名前を呼んでから挨拶をすればよかったね。

③ 気づいてくれるまで何度も挨拶をすればよかったね。

④ 「考え事をしていたので、気づかなかったんだな」と善意に解釈したらどうか。

「①」の「もっと大きな声」は「君の挨拶が小さいからだよ」と暗に言っています。Bさんに非があると云っているようなものです。

自分から挨拶し、善行を働いたと自負しているだけに、それを否定されると納得できない気分になります。

「でも、聞こえるような大きさの声だったよ。先生はA先生の味方？」と怒りの矛先が私に向きかねません。

「③」の「何度も挨拶」は善意の押し付けです。挨拶は善意の体現です。恩着せがましくやるのではなく、さりげなくやれば好感を持たれます。

善行も、何回も繰り返せばくどくなります。相手が気づくまで、反応するまで繰り返すと、口調がきつくなり、表情も険しくなります。ムキになっていると受け取られます。

明るく、笑顔で、爽やかにやるのが「挨拶」の必須条件です。

「④」の「善意に解釈」は大人の発想です。確かに、相手の状況を察することは良好な人間関係作りには欠かせない配慮（技術）です。大人ならそれができるのでしょうが、相手の気持ちを斟酌できないのが「コドモ」です。

それに、「挨拶をしなくても許される」という誤った解釈を与えてしまいます。「気づかなか

かった」「考え事をしていた」という申し開きが通用してしまいます。

「挨拶を返さなかった」という罪悪感を覚えることは重要です。だからこそ「次は気をつけよう」と反省するのです。

挨拶の「挨拶」は「迫る、そばにくっつく、身動きができないほど近寄る」という意味があります。旁は「人がつかまえて止まるさま」を表しています。「挨拶」も「挨拶」と同様の意味があります。

ここで注目する語源は「つかまえて止まるさま」です。相手の心を言葉で「つかまえる」のです。そうすれば、相手はその場で立ち「止まって」挨拶を返してくれます。

「②」はまさにその具現です。名前を呼ばれたらどんな人でも一瞬、間ができます。時間が止まります。振り向きます。立ち止まります。そして、何の用事だろうと思いつながら「ハイ」と返事をします。その瞬間、目が合います。  
“face to face”です。

立ち止まってくれたらしめたものです。相手はあれこれ思いを巡らしながらどんな言葉を発するかを待っています。につこり笑って「おはようございます」と挨拶すれば、それにつられて微笑んで挨拶を返してくれます。人は、自分がしたことを返してくれます。自分が微笑めば相手も微笑みを返してくれます。こちらが囁けば、相手も囁くような声量になります。

Bさんは早速名前を呼んで挨拶を試みたそうです。今度はA先生から挨拶を返してもらえました。しかも、「Bさん、元気だね」と声をかけられたとニッコリでした。

教師の腕前が試される、学級経営のひとくふう。  
ベテラン先生によるケーススタディです。  
こんな時、あなたならどうしますか？

2 挨拶の意義を問う聞き方

朝の児童昇降口。児童会の子どもたちが挨拶運動を行っています。朝の会で挨拶の様子を聞きます。

Q2

気持ちのいい挨拶を続けるには、  
どんな聞き方をしますか。

- ① 何人に挨拶をされましたか？
- ② 何人に挨拶をしましたか？

一見すると聞き方に違いがないように思えます。要するに挨拶を「されたか」「したか」の違いです。

「②」は自分から進んで挨拶をしたかどうかを聞いています。おそらく、子どもたちは「挨拶をした」と誇らし気に挙手することでしょう。しかし、これでは自分から挨拶をするだけでなく大事なのだと誤った解釈をしてしまいます。挨拶をした段階で完結してしまうのです。挨拶は自分のためにするものではありません。

私なら「①」です。

挨拶を返してもらうためには、自分の挨拶を相手に認識してもらう必要があります。一番挨拶を返してもらったC君に聞きます。

「気持ちのいい挨拶を返してくれたのは誰？」  
「D君です」

D君は意外な表情を浮かべます。自分は普通に挨拶をしただけだったにもかかわらず、C君が評価してくれたからです。

「よかったね、D君。どうしてそんなに上手な挨拶ができたの？」

「C君が手を挙げながら『おはよう』って言ったの。僕の名前を呼んでね。びっくりしたけど、僕も負けられないように挨拶をしたんだ」  
C君が爽やかな挨拶をしたので、D君も気持ちのいい挨拶を返せたのです。

「僕に挨拶してくれたんだ」と相手を感じ、条件反射的に挨拶を返してくれたらしめたものです。相手が強く感じれば感じるほど、速やかに大きな挨拶が返ってきます。

挨拶されると自分は相手にとって特別な存在なのだと思います。C君の挨拶に触発され、それに応えるような挨拶をD君はしたのです。C君の挨拶はD君を通して返ってきたのです。まさにミラー効果です。

挨拶を返されるということは「正しい」挨拶をしているという証拠なのです。

3 挨拶の習慣化を図る手立て

挨拶は習慣です。朝の会で毎回「何人に挨拶されましたか」と聞くことはタイムスケジュール的に無理です。

そこで、このいい習慣を維持するために、『OF』の著者陣でもあり、友人でもある佐々木智光先生から教えていただいた標語を紹介します。

あいてより (相手より)  
い つも (いつも)  
さ きに (先に)  
つ づけよう (続けよう)

朝の会、お客様が来校する時など、機会をとらえて復唱します。

「あいさつ」の「あ」  
子どもたちは声を揃えて言います。

「相手より」

「あいさつ」の「い」

「いつも」

こうして「つ」まで続けます。

最後に、教師が

「あいさつは、…」

と子どもたちに向かって発します。

「相手よりいつも先に続けよう」

息の合った子どもたちの声が教室に響きます。さらに念押しです。「あいさつは」と身を乗り出して早口で言います。すると、子どもたちは教師に負けないくらいの早口で「相手よりいつも先に続けよう」と返します。早口で暗誦できるということは暗記している証拠です。

